大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

戦後史における働く若者の位置についての覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003173

戦後史における働く若者の位置についての覚書

土　井　洋　一

1．青年期という対象

大阪府立大学を定年で退任するに際し、思い当ったことがある。私が一貫して関心を抱いてきた研究テーマは、青少年問題、正確には思春期にあたる青年前期から成人を含む青年後期までの発達問題だったことである。方法としては、歴史研究であったり調査研究であったりした。フィールドも多岐にわたったが、対象は動かなかったように思う。

3年間ではあったが、家庭裁判所で少年非行問題と向き合った。大学院生の時は、勤労青年学級の現場で鍛えられた。「大学院生は、文献資料ばかりいじくって研究業績をあげることに熱中していてはいけない。どこかの実践現場に行きなさい。」というのが、進学した研究室の不文律だった。恨みに思うほどつらかったが、今思うと感謝している。今に至る私の山仲間には、元学級生がいる。一昨年は、関西に在住する元学級生やご家族たちと、ささやかな宴会を催した。

大学教員としては、通算31年になる。実は、大学院修士課程2年から博士課程3年までの4年間、大正大学の助手を兼ねていたので、実質は35年である。ただし、このことは履歴書には書いていない。これで、実は経済的には助かった。だから私は、返還義務のない院生時代5年間の奨学金を全額返還してきた。もっともこの時に、遅れてきた大学紛争に巻き込まれ、生活は破綻寸前、重病で生死をさまよった。大学院での研究もおろそかになったのでは、「経済的には助かった」以上にマイナスだったかもしれない。しかし、ここでも助手闘争を通じ、同僚の助手、他専攻の院生や学生たちとの交流が深まり、社会福祉学系の学生や卒業生たちとの人間的な絆が生まれた。当時は、まだそんな激動の時代だったのである。

2．勤労青年たちへのエール

主任教授らの尽力で専任教員になることができてから、落ち着いた生活が戻ってきた。ある栄養学系の大学で非常勤講師として社会福祉の講義をしていた頃、夜学の調理師資格科目「社会」を教えてくれないかという依頼を受けた。大学の先生たちは嫌がってなかなか引き受けてくれないらしく、私が喜んで引き受けたものだからびっくりされた。受講生は中卒後間もない10代から60代の高齢者までまちまちであったが、予想どおり、大多数は若者であった。

学習意欲に燃えているとは思えない彼らと格闘してみようと思ったのは、一人一人の生育史と生活現実を知り、今、彼らがなぜ調理師の資格を得ようと夜学に足を運んでくるのか、それを知りたかったからである。実際、昼間遊んでいる受講生は一人もいなかった。あてがわれたテキストなどは無視して、生活体験、勤労観、家族観、将来設計などをテーマに次々とレポートを書かせたら、この講師はとんでもない奴だ、こんなにいじめられてはかなわない、ということになったようだ。ある日、教室に入ってみると若い女性が一人だけ前列の席に座っていた。理由を聞いたら、自分は先週の授業をやむなく欠席したので遅刻しないように出てきたが、誰もいないのでおかしいと思っていると言う。致し方ないので、一対一で授業を始めたところ、後部ドアを少し開いてのぞき見している者たちがいる。「入ってきたら」と言うと、受講生がぞろぞろ入ってきた。聞いてみると、私をこらしめてやろうと思った、誰も来なければ私が困って授業のやり方を変えるだろう、だけど欠席者まで連絡がつかず失敗した、ということだった。

彼らと、本当のつきあいが始まったのはそれからである。喫茶店や飲み屋での交流もふえた。そうした過程で解ってきたことを、ある書物に研究レポートとしてまとめた。親しい研究者の友人から「寝っころがって書いただろう」と言われたのはショックだった。この頃から、私の研究姿勢は、社会福祉学界のオーソドックスなスタイルから逸脱していったのかもしれない。そうだとしても、今の私に後悔の気持ちはない。それはそれで、致し方のないことだからである。

3．戦後史のなかの青年期問題

中村正則著『戦後史』（2005.7　岩波新書）という、シンプルな題名の好書が出た。正村公宏著『戦後史』（上、下　筑摩書房　1985）が古くなって以後、新たな刊行である。ただし、両書の思想的立場の違いに、ここでは言及しない。

本書の基幹部分（視点と方法）を簡潔に紹介しておく。

1）貫戦（争）史（Ｔｒａｎｓ－ｗａｒ　ｈｉｓｔｏｒｙ）という方法

①戦前、戦後の連続説の一つ。

②しかも、その両面をグローバルな視点からとらえること。

「戦後改革を近代化、現代化、前近代残存の三層の重層的改革ととらえる」

2）時期区分

①敗戦と占領、朝鮮戦争、サンフランシスコ講和条約、日米安保条約（1945～1960）

②高度経済成長、ベトナム戦争（1960～1973）

③第一次石油危機～冷戦体制の終焉、バブル崩壊（1973～1990）

④湾岸戦争～９．１１同時多発テロ、イラク戦争（1990～）

とくに、本論稿に関するものとしては、以下の部分がある。

3）働く若者への言及（266～269頁）

①フリーターの実態

②青年の保守化（107頁）

③若者の未来

こうしたオーソドックスな歴史書が、働く若者について多くの頁を割くのは珍しいのではないか。というより、そういう時代に入ったということなのだろう。約500万人に達するフリーターの実態は、壮絶極まる。正社員の平均賃金387万円に対し、フリーターが106万円、生涯賃金では前者が２億1500万円、後者は5200万円という。若者の５人に１人がフリーターというのが現実である。

中村は、山田昌弘の「日本社会は、将来に希望をもてる人と将来に絶望している人に分裂していくプロセスに入った」という文章（『希望格差社会』

筑摩書房　2004）を引用している。だが、重要な問題は山田の言う、勝ち組と負け組という二分法を超えて、「若者に希望があるのか」という一点につきる。つまりは、正社員の若者にも希望があるのか、ということである。二分法の思考方法は便利である。正・反・合の弁証法も、二分法を駆使した論法であって、私たちも馴れ親しんできた。しかし、勝ち組と負け組という区分は現象論である。バブル社会の後遺症を引きずりながら、今、たどりついたのがギャンブル社会であるとすれば、両者の区分は恒久的ではないし、またそういう社会は健全とはいえない。

私は、今、上手に社会現象を調理する社会学者よりも、高村薫という大阪在住の作家の処世に注目している。3年半ぶりの新作『新リア王』を読んでみたい。「明らかに政治が後退している時代に、小説で抵抗してみたかった」という彼女の硬骨はすさまじい（「小泉改革という幻想」『現代』2005.12）。

4．青年期の社会構成

私がこれほどまでに青年期問題にこだわって生きてきたのには、わけがある。学生時代の社会調査ゼミで、東北・岩手の集団就職者の聞き取り調査にあたった経験がとても大きい（小川利夫・高沢武司編『集団就職　その追跡研究』明治図書　1967）。

中卒生の集団就職列車は、高度経済成長の終息とともに1970年代初頭で絶えた。彼ら、彼女らの生き方は、学生の私たちに多大な影響を及ぼした。詳細は省くが、抽象的に言えば、「二つの青年期」の問題である（別添文献参照）。学歴（学力ではない）の差別は確かにあっただろうが、当時の社会は大学進学者が2割にも達せず、今日の高学歴社会ではなかった。大多数の中卒・高卒者たちは、その後就職し結婚して、その多くは安定した生活基盤を築き、日本社会の中核を形成していった。大卒者を含めその多くは、いわゆる“団塊の世代”と呼ばれる。息子や娘たちを甘やかし追い立てて、パラサイトシングルやニートに仕立て上げた世代だ、などとメディアは騒ぐが、これは無責任な言動である。時代というものは、世代論で決まるものではないのではないか。

本題に戻すと、要するに、当時の中核をなした人々（家族）は、その生い

立ちのなかで多くの知己というか、支援者たちに支えられて生きてきたに違いない。例えば、中小企業や零細の自営業に就職しても、定時制高校に通学させてもらえたり、自立（暖簾わけ）の夢を抱いて生きていく環境があったりしたことを、私は聞き取り調査のなかでよく記憶している。つまり、暖かい人間関係があちこちに張られていて、若者たちは成長していくことができたのである。

言葉は悪いが、少数の脱落者（非行対策他の対象）たちの処遇を含め、バランスをとってなんとか進めたのが、1970～1980年代前半までであった。

しかし、その後、事態は急変していく。

第一に、発達上の諸問題が顕在化し、第二に、中間層としての不安定就労者の増加、第三は、反社会的、非社会的若者の増加である。

これらは、相互につながっており、とくに第一の点が、基底となっている。もちろん、労働経済上の角度から考察されて然るべきなのであるが、その角度だけで問題をとらえると、景気回復→雇用回復→若年労働力の需要拡大、という図式に乗ってしまう。そういう思考回路だけでよいのだろうか。もっとも、ＮＨＫスペシャルで放映された「漂流するフリーター」（2005.2.4）は、衝撃的であった。私は、観ながら絶句し、とんでもない社会になったと思うと同時に、自分がなんと情報をもっていないかを思い知らされた。これでは私の考えてきた「中核」層が育たないのではないか、私はそんな恐怖を覚えた。

格差社会＝不平等という分かりやすい公式が問題化している。大いに結構で、京都大学の橘木教授のほとんどの著書を私も読んできた。しかし、経済学的な見方がすべてではないであろう。「清く貧しく美しく」とは言わないまでも、現代人は金にこだわりすぎる。少し貧しいが、少し豊かだが、額に汗して働き、家族を思いやり、地域社会で役割を果たし、死んでいく。こうした人生のサイクルが馬鹿馬鹿しいということになる社会は、恐ろしい。「中流」と、私の言う「中核」は、重なりながらやはり違う。

バブル経済を経て、今日、私たちの国、社会は大きく変容した。大人社会のモラルハザードが青少年に伝播し、その若者たちの蛮行が大人社会のひんしゅくを買っている。大人は、いい気なものである。天に唾する愚に気がつかないのである。

５．結語

戦後史における若者の位置について考察してきた。若者は次代の担い手であり、少子高齢社会の重要な働き手である。彼らは、暮らしを築く生活者として、一人でも多く正規雇用されて欲しい。そして、月並みだが、青年がたどる二つの試練が、①就職、②結婚であることを再確認しておきたい。私たちは、今、ごく当たり前の常識を忘れてしまいがちだからである。